

P-59 アトピー性皮膚炎の1例

○大矢奈佳¹ 林 吉夫¹ 大崎恵子² 有馬祐子¹
植田里香¹

¹林内科クリニック, ²いまいせ心療センター

【目的】アトピー性皮膚炎の1例に対して、漢方薬とカウンセリングの心身両面から行った治療について報告する。

【症例】35歳、女性。看護師として働き始めて間もなく、アトピー性皮膚炎を発症した(X-13年)。皮膚科での治療を続け職場も変わったが、状態は一進一退であり、X年4月に当院を受診した。初診時、顔は赤く腫れ上がり、全体に掻きむしった痕があり重症感があった。皮膚科での治療は継続し、当院ではごく少量の抗不安薬、抗うつ薬、漢方エキス剤による薬物療法と、心理カウンセリングで治療を行った。X年5月、皮膚の状態はあまり変わらず、漢方を去湿、補陰、清熱を中心とした煎じ薬に変更した。X年7月、皮膚に改善が見られ、汗をかくようになった。X年10月、頸部の色素沈着も改善し、内服薬は漢方煎じ薬のみとした。

カウンセリングは、X年5月～X+1年8月まで31回実施した(25回目より心理士交代)。カウンセリングでは、患者が感情的な母親に誤も分からず怒られて育った体験から、様々な感情を感じないようにして自身を守ってきたことが、現在の症状の発現にも繋がっている可能性を共有し、感情を恐れず自然に出せるようになることをサポートした。また、患者は今よりもっと頑張らなければいけないという思いが強かったので、力みすぎずに心地良く過ごす体験を心がけるよう話し合った。X+1年8月に、患者は「これまで自己主張をせず、周りに合わせ過ぎていた。もう少し自分を大事にして堂々と生きる方がいいのかなと思う」と話した。

【考察】まず皮膚そのものに漢方が効き、痒みが減り皮膚の状態が改善したことが良い方向へ作用したと考えられる。さらにカウンセリングで、今まで人に話せなかった辛さを話し支持的に受け止められたことや、自身の体験の仕方について内省が進み気づきがあったことも相乗的に作用し、再発悪化の予防に役立ったと考えられる。

P-60 GAD-7 日本語版の妥当性・有用性の検討

○村松公美子¹ 宮岡 等² 上島国利³ 村松芳幸⁴
布施克也⁵ 吉嶺文俊⁶ 穂坂路男⁷ 久津見律子⁸
真島一郎¹⁰ 片桐敦子⁹ 村上修一¹⁰ 清野 洋¹⁰
田中 裕¹⁰ 成田一衛¹⁰ 荒川正昭¹⁰ 櫻井浩治¹⁰
藤村健夫¹⁰ 馬場繁二¹¹

¹新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科, ²北里大学医学部精神科, ³国際医療福祉大学医療福祉学部, ⁴新潟大学医学部保健学科, ⁵新潟県立小出病院, ⁶新潟県立津川病院, ⁷勝山診療所, ⁸福井中央クリニック, ⁹片桐医院, ¹⁰新潟大学医歯学総合病院, ¹¹馬場クリニック

【目的】プライマリケア領域において、短時間で全般性不安障害(GAD)を評価する質問票は少ない。自己記入式質問票 GAD (Generalized Anxiety Disorder)-7 日本語版の妥当性および有用性について検討した。

【方法】総合病院、内科医院などの内科、心療内科外来を受診した患者のうち、本研究の趣旨を文書にて説明し同意を得た患者120名を対象とした。まず GAD-7 日本語版を記入してもらい、その後 GAD-7 日本語版の結果を知らない医師(内科医、精神科医)によって、48時間以内に M.I.N.I.による面接を行った。他 PHQ-9, HAD も併行して実施した。

【結果】GAD-7 日本語版による全般性不安障害の診断と M.I.N.I.による診断との一致率は、sensitivity, specificity, Kappa 係数, Overall Accuracy などいずれも良好であった。

【結論】GAD-7 日本語版は、M.I.N.I.と高い一致率を示し、プライマリケア領域における全般性不安障害の評価において有用な自己記入式質問票であることが示唆された。